

『「かしこい」クルマの使い方を考える』特集にあたって

藤井 聡（東京工業大学）

自動車，すなわち，我々が日常会話で言うところの“クルマ”は，我々に多大なる移動の利便性と自由をもたらした一方で，渋滞や交通事故はもちろんのこと，近年では都市の郊外化や環境問題などの様々な社会的な弊害が生ずることともなっている．すなわち，クルマはメリットとデメリットの双方を併せ持つ両義的存在であり，それ故，我々の交通社会で求められているのは，クルマに過度に頼ることも過剰に排斥することでもなく，適切なバランス感覚の下，「かしこく」クルマを使いこなしていこうと構えることなのである．

それでは，そうした「バランス」を期する上で何が必要とされるのであろうか——．例えば，卑近な例ではあるが，日常の暮らしの中で我々が使いこなしている「はさみ」について考えてみよう．

言うまでもなく「はさみ」は日常の様々な場面で何かと重宝する便利な道具であるが，その使い方を一歩間違えれば大層危険な凶器となり得る．それ故，いずれの家庭においても子供に対してはその便利さを理解させると同時に，それが如何に危険な道具となり得るかを丁寧に言って聞かせている．そして，そうした教育を通じて子供達のはさみの危険性を十二分に理解すれば，「はさみ」のリスクは最小化され，その利便性を存分に享受することができることとなる．

この「はさみ」の例は，メリットとデメリットの双方を持つ道具をかしこく使いこなすためには，そのメリットのみでなくそのデメリットを十二分に理解することが何よりも必要なのだ，ということを暗示している．それ故，クルマを「かしこく」使いこなしていくことを志すなら，クルマのメリットのみならず，**そのデメリットもまた公正かつ冷静に，そして客観的に理解することが，何よりもまず求められている**のである．

本特集は，こうした認識の下，企画されたものである．すなわち，クルマのデメリットを回避する一方で，クルマのメリットを最大限に引き出すことと目的として，クルマが社会的に如何様な存在であるのかを客観的かつ全的に理解することを促すことを意図して企画されたのが本特集である．

本特集ではまず，クルマという存在が我々の社会にどのような影響を及ぼしたものであるのかという点について，高田公理先生に「日本社会と自動車」という原稿の中で論じていただいた．高田先生には，自動車が日本経済の中でどのような位置を占める存在であるのか

という点をとりとまとめていただくと共に、明治の時代から現代に至まで、日本社会の中でクルマがどの様に受け入れられ、取り扱われてきたのかを、豊富な文献に基づいて包括的に論じていただいた。

続いて谷口綾子先生には、そうした日本社会におけるクルマの位置づけの経緯の中でも、特に日本のモータリゼーションが進展した戦後の高度成長期以降に着目した考察を「自動車広告の変遷と、公共交通広告との差異」という原稿の中で論じていただいた。その考察は、クルマを巡る大量の「広告」の内容に関する包括的な定量的分析を通じてなされたものであり、とりわけ、クルマとならぶ重要な交通手段である「公共交通」についての広告とクルマのそれとの対比を通じて、クルマが単なる「便利な交通手段」という道具以上の、ステータスシンボルとしての意義や娯楽性を伴う存在としての意義を色濃く持っている様子を浮き彫りにしていただいた。

さらに、西村大志先生にはそうした「非道具的」な存在意義が色濃く表れている象徴的現象として、「改造車」を巡る近年の動向を「改造車研究の可能性」という原稿の中で紹介していただいた。「移動手段という道具としての意義以上の意義」をクルマの中に見いだす傾向が近年加速化しつつある様子を、雑誌等のマスメディア上の膨大な数に述べるクルマを巡る種々の言説を踏まえつつ論じていただいた。

この様に、「クルマ」という存在は、単なる道具ではなく、我々現代人の趣味や娯楽に色濃く影響するような多元的価値を象徴する存在である一方で、様々な社会的な問題点を持ち得る存在である事を、室町泰徳先生、ならびに、田中尚人先生・中村良夫先生にそれぞれ描写していただいた。

室町先生には、「通勤者の交通手段選択と健康」という論説の中で、クルマ利用時の肉体的な運動量がクルマ以外の徒歩や公共交通、自転車を利用している場合のそれと大きく異なる点に着目し、クルマ利用の増進が社会における肥満傾向の増進をもたらす、ひいては、成人病の疾患者数、さらには政府における医療費の支出の増大に繋がり得るという点を、種々のデータに基づいて論じていただいた。

さらに、田中先生、中村先生には、モータリゼーションによって、日本の都市文化に大きな影響を及ぼしたという点について「都市再生における道づくり」という原稿の中で指摘していただいた。特に、都市内における自動車交通の進展は、一人ひとりの人間が都市から「切り離されて（遊離）しまう」傾向を助長すると共に、「社交」や「みち遊び」などのための公共空間として重大な意味を持ち続けてきた街の中の「道」を、単なる移動手段のための「パイプ」にせしめたという事態が改めて指摘された。しかし、クルマによって種々のインパクトを受けた現代都市の有り様を前提としつつも、都市の活力とその魅力を

増進させるためになすべき「手だて」は数多く残されているという点もあわせて指摘していただいた。

このような、クルマが我々社会にもたらしている「デメリット」の存在を全面的に認めながらも、そのデメリットを最小化するための様々な取り組みにおける代表的な事例が、大聖泰弘先生によって「自動車の環境・エネルギー技術に関わる将来展望」の中で紹介された。この原稿は、地球温暖化対策を巡る議論の中でもとりわけ重視されている二酸化炭素排出量の問題を取り扱ったものであり、それを可能な限り低下させるこれまでの技術的取り組みと、これからの展望の双方を包括的に論じていただいた。そしてその結論として、その抜本的な低下は十分可能であるという見通しが主張されている。

この様に、本特集ではクルマが我々に移動上の利便や経済発展をもたらしたばかりではなく、クルマ以外の存在では供給し得ない様々な娯乐的、ステータスシンボリックな意義を我々にもたらした一方で、環境問題や健康問題、都市文化の問題等、様々なデメリットをもたらした存在であることを述べた。しかし、それらのデメリットは、その存在を「明示的に意識化」することによって、意図的に最小化し得るのではないかという可能性を、都市文化や環境技術の観点から指摘していただいた。こうした本特集の議論の展開を踏まえた上で、我々が本当の意味において「かしこく」クルマとつきあうためには、どのような歴史観を携えるべきなのかという点を、拙稿「自動車を巡る社会哲学的論考」の中で論じた。この論考の中では、クルマという存在そのものを深く理解するには、クルマが発明された時代的背景そのものを見据えることがまず必要であろうことを指摘した。そして、産業革命やフランス革命によってもたらされた「近代」という時代そのものを象徴する存在こそがクルマなのだとの認識が必要であろうことを指摘した。その上で、クルマの諸問題の解消を目指す試みは、近代そのものの超克を志すという試みと相似をなしており、「クルマとかしこくつきあう」ためにはクルマがもたらす様々な帰結を冷静かつ徹底的に認識すると共に、その問題を克服するためのあらゆる努力を不断に続けていく態度こそが求められているという点を指摘した。

以上の様に、本特集では、クルマという存在を単なる交通手段と捉えるのではなく、社会的、歴史的、文化的な存在と捉え、そのクルマとの「かしこい」付き合い方を考える種々の議論をとりまとめた。言うまでもなく、本特集を通じて、あるべき「付き合い方」そのものを結論的に明らかにしたとは言い難いものの、そのあるべき「付き合い方」を考える契機を提供するものとして捉えることはできよう。我々が生み出したクルマによって我々がより豊かになるにせよその逆の帰結を迎えるにせよ、それは全て我々の振る舞い一つにかかっているということだけは間違いない。そうであればこそ、本特集の各論者が示した

様々な論点からクルマという存在を徹底的に公正かつ冷静に認識し、その上で、その付き合い方を考え続けていかねばならないということは、クルマを生み出した当の本人である我々に背負わされた運命的事態なのである。